

江戸版以前の出版界

柏 崎 順 子

これまで江戸初期出版界の様相について、万治・寛文期に江戸において独特の造本様式で作成された、いわゆる江戸版の考察を基軸として、京都と江戸の出版界の交流の実態について考察を重ねてきた。その結果、京都と江戸の出版界は双方向にコンテンツの提供を行っていることが明らかとなってきた。万治・寛文期は、舞の本や仮名草子のテキストは京都から江戸への提供があり、いわゆる江戸版が作成されている。この舞の本や仮名草子に対し、古浄瑠璃は逆に江戸から京都へというテキストの流れが確認できる。ただしこれは江戸の日比谷横町で営業していた又右衛門や又左衛門という書肆が出版していた浄瑠璃の正本に限られており、通油町で営業していた一群の書肆が出版した浄瑠璃の正本について、京都の書肆がそのテキストを利用することは行われていないようである。したがって古浄瑠璃のテキストの利用は江戸の特定の書肆、具体的には又右衛門や又左衛門と、京都の山本九兵衛や鶴屋喜右衛門等との関係と考えられるのであるが、舞の本や仮名草子についても同様に、京都の特定の書肆と江戸の江戸版を作成する特定の書肆のグループ間に固有の関係が存していたのである。

以上のような江戸初期の大まかな構図が明らかとなった上であらたな課題が浮かび上がってきた。

舞の本、仮名草子、古浄瑠璃という当時の娯楽に供するような本については、その題材を共有していることは周知のことである。それならば一旦京都から江戸に入った題材は、ジャンルを越えて共有されていたのであろうか。江戸の営業場所の観点からいえば、通油町には古浄瑠璃を専門に出版する書肆が何軒か営業しているが、その通油町は、舞の本や仮名草子をいわゆる江戸版様式で出版する書肆、本間屋や山本九左衛門が近接の大伝馬三丁目で営業をしており、おそらく松会も元禄期の松会版に記載されている住所である長谷川町が通油町の近隣であることから、同様の区域での営業であることが推測される。つまり江戸版を出版する書肆と、古浄瑠璃を出版する一群の書肆は同じ区域で営業をしているのである。なおかつこの通油

町界限で営業する書肆たちは、古浄瑠璃も含めジャンルを問わず、京都からコンテンツの提供を受けている書肆たちと括ることができる。そこで、この通油町界限で営業する書肆たちにジャンルの枠を超えての繋がりがあるかどうかは初期出版界の様相を考察する上で確認しておかなければいけない課題といえる。

以上のようなことを勘案すれば、初期出版界の娯楽本に関する出版の展開は、京都と江戸の関係という問題系と、娯楽本のなかでも異なるジャンルの本を出す書肆間の関係という問題系、それと関連してテキストの供給のあり方、共有のされ方という問題系という、三方向からの検討が必要ながことが明らかとなってきた。

これまでの考察は、江戸版の存在を基軸として行ってきたために、江戸版を出版する書肆と京都の書肆の関係という視点でその関係性を明らかにしてきた。それは即ち万治・寛文期の状況を考察するということを意味していた。しかし江戸初期出版界において娯楽本の出版が広く展開していくようになるそもそもの要因を検討する場合、江戸版という基軸から一旦離れて、より大枠での京都と江戸の関係性を考察する必要が生じる。そこで本稿では、江戸において本格的な娯楽本出版の嚆矢として登場してくる松会が、江戸版の造本様式で出版を開始する以前に行っていた京都版の覆刻本、あるいは求版で出版していた本についての京都との関係性について、および通油町界限で同時期に営業していた異なるジャンルの娯楽本を出版する書肆の関係性について等を考察することを目的とするものである。

京都書肆中野氏と松会

書肆松会が江戸版を作成する以前、即ち明暦以前に出版していた本は、京都版の覆刻や求版が少なくないのであるが、こうした江戸版作成以前の本の元版はどのような書肆であろうか。そもそも書肆松会は、出版業を開始した時点において、出版本という商品を作成するために必要なテキストを持っていなかった。そのためテキストを確保するための試みのなかの一つが江戸版の作成という位置づけができるのだが、さまざまな出版物のなかでも、とりわけ娯楽に供するような本に絞って江戸版が作成されているという事実を考えれば、そうしたコンセプトの出版にシフトしていく何らかのきっかけが存在したことが考えられる。

これまで最も早い松会版は「正保四年丁亥霜月吉日」の奥付をもつ『光明真言初心要抄』(国文学研究資料館所蔵)であった。この松会版『光明真言初心要抄』は、京都の中野五郎左衛門版(東京大学総合図書館所蔵)の覆刻本である⁽¹⁾。行数や字詰めは全く同一でありつつ、覆刻というにはやや稚拙な模倣であるが、かといって

松会版の文字が中野版の文字の形状からまったく自由でないことは明らかである。最近いま一本、同じく正保四年の刊記を有する松会版『八宗伝来集』が出現した。「正保四仲冬／松会市郎兵衛」という刊記を有している（図1）。この本は京都の書肆平野平左衛門版『八宗伝来集』（国文学研究資料館所蔵）の覆刻本である。松会版『八宗伝来集』の刊記部分をみると、「松会市郎兵衛」の部分の墨付きが濃く、一見、松会版は覆刻ではなく、平野版の書肆部分を入木修正した求版ではないかと疑われるのであるが、両版は異版である。まず覆刻本が作成され、その覆刻本を松会版が求版したということなのかもしれない。ちなみに松会版とも異なる、もう一本無刊記の覆刻本も存在している。

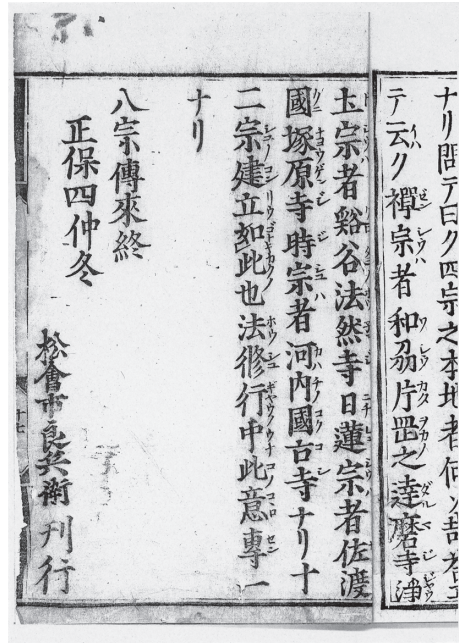


図1 松会版『八宗伝来集』（架蔵）

松会版『光明真言初心要抄』も松会版『八宗伝来集』も覆刻本であるから、松会版の年記、正保四年が刊行時を示すものではないことはいうまでもない。しかし松会版で最も古い刊記がどちらも正保四年であることを考えると、松会が出版を開始するにあたって、その当時出版されたばかりの仏書を相次いで入手し、覆刻したと推測することにあながち無理はあるまい。松会の出版は正保末年あたりではないかと考えられる。

このうち『光明真言初心要抄』の元版である中野五郎左衛門は、いうまでもなく京都の初期出版業の老舗中野氏一族の一人である。実は松会版には、この五郎左衛門にとどまらず、中野一族が元版と推定されるものが少なくない。以下のような本がそれである。各本の刊記の後の矢印の先が松会版の年記である。

《市右衛門一道伴》

- 『黒谷上人伝絵詞』寛永三丙寅曆孟夏上旬／於四条寺町大文字町／中野市右衛門尉開之→松会版 寛文六年

- 『一休水鏡』寛永九年壬申六月／中野市右衛門刊行→松会版 承応三年
- 『小笠原百ヶ条』寛永壬申（九）六月／中野市右衛門刊行→明暦二年
- 『二十四考』寛永九壬申九月吉旦／中野市右衛門刊行→明暦二年
- 『尤之双紙』寛永甲戌（十一）六月吉日書舎中野氏道伴刊行→寛文九年・寛文十三年
- 『塵却記』寛永甲戌（十一）仲冬穀旦／中野市右衛門梓行→万治二年
- 『和名集并異名製剤記』寛永癸酉（十）三月吉旦／中野市右衛門梓行→寛文十一年
- 『医方大成論』寛永四丁卯歳九月吉辰 道伴梓行→延宝三年
- 『観世流謡本』寛永十三丙子年三月吉日／道伴→延宝五年・延宝七年・無年記
- 『初登山手習教訓書』寛永丙子（十三）初冬吉旦／中野市右衛門刊行→慶安五年

《小左衛門一道也》

- 『医方大成論』寛永四丁卯歳九月吉辰／道也梓行→慶安五年
- 『富士の人穴草子』寛永九年壬申孟秋吉旦／中野道也新刻→万治二年
- 『うすゆき』寛永九年壬申十二月／吉日 中野氏道也梓→寛文五年・貞享三年
- 『しんきよく』寛永九年壬申十二月／吉日 中野氏道也梓→寛文七年
- 『かげきよ』寛永九年壬申十二月／吉日 中野氏道也梓→万治二年
- 『庭訓往来』寛永乙亥（十二）夏五月吉日／中野氏道也刊行→寛文二年・寛文九年・延宝三年
- 『御成敗式目』寛永乙亥（十二）夏五吉旦／中野氏道也刊行→万治元年・万治二年・延宝二年・延宝三年・延宝六年・延宝六年（別本）・無年記
- 『大ざつしよ』寛永十三年春二月道也刊→無年記
- 『実語教童子教』寛永十三年三月日開板→無年記
- 『初学文章抄』寛永拾三年三月吉日道也刊行→承応二年
- 『自讃歌註』寛永十三夏五吉旦／中野道也刊行→延宝八年
- 『和漢朗詠集』寛永丙子（十三）林鐘／吉辰 道也刊行→延宝二年・天和三年・無年記
- 『した』⁽²⁾→明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→万治二年
- 『十番切』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→無年記
- 『たかだち』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→明暦四年・無年記

- 『八島』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→明暦四年
- 『しんきよく』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→寛文七年
- 『わださかもり』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→寛文五年
- 『あつもり』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→無年記
- 『かげきよ』明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也刊→無年紀

《是誰》

- 『塩山仮名法語』寛永癸未（二十）中春吉辰／中野氏是誰新刻→無年記
- 『仏説善惡因果経』寛永甲申（二十一）中冬吉辰／中野是誰→明暦二年
- 『和名集并異名製剤記』正保三丙戌暮春吉／中野是誰梓行→寛文十一年
- 『東福一國師法語』正保三年丙戌仲夏吉日／書林中野氏是誰→明暦二年

《五郎左衛門一道閑》

- 『黒谷上人伝絵詞』寛永甲申（二十一）孟春吉旦／書舎五郎左衛門梓行→寛文六年
- 『庭訓往来』寛永二十一年甲申仲春吉日／五郎左衛門→寛文二年
- 『初学文章』寛永二十一年甲申三月日／五郎左衛門梓行→承応二年
- 『光明真言初心要抄』正保四年丁亥霜月吉日→正保四年

《太郎左衛門》

- 『済民記』慶安四辛卯歳仲冬吉旦／中野太郎右衛門→延宝三年・無年記
- 『新古今集』承応三歳仲夏吉辰／中野太郎左衛門刊行→承応三年

上記の中野版と松会版の刊年から明らかなように、両者の繋がりとは明暦以前から万治以降にまで涉っているようである。

書肆中野一族については安藤武彦によって、その菩提寺、京都市百萬遍の了蓮寺の過去帳に記載された中野諸氏の没年が紹介されている⁽³⁾。それによれば、中野市右衛門道伴は、過去帳の冒頭に貼付されているという「即中道伴居士／寛永十六年四月六日／中野道也兄也」によって寛永十六年に没したことが判明している。宝永七年刊『弁疑書目録』に、「京都書林ノ興行ハ中野道伴トイフ人ナリ、此道伴ハ始メ文之ノ儒門ニ事ヘシ人ナリ、故ニ此文之ニ因テ始テ四書ノ植字本ヲ出ス、亦後ニ点附ノ印本ヲ以テ四方ニ流布ス、則チ文之点ノ四書トス」と記載されていることが

森潤三郎によって紹介されていて⁽⁴⁾、学問をしていい人物であることがわかる。住所は四条寺町である。「元和三年丁巳曆孟夏吉旦 於四条／寺町板行 市右衛門 有之」の刊記をもつ古活字版『天台四教儀集注』（駒沢大学図書館等所蔵一未見）が存する。以後、古活字版仏書の出版が続くが、寛永五年あたりから次第に整版の出版にシフトしていく。

その弟、小左衛門道也は、寛永二年に『八雲御抄』（『奥野寛永版本目録』一未見）が出版されているという。寛永十年『成唯識論』の刊記に寺町通五条上ル丁と住所が記されている。過去帳によれば寛文二年六月三日に没している。

五郎左衛門道閑は、市右衛門・小左衛門との関係は明らかではないが、過去帳によれば、戒名は浄岸珠清、延宝元年十月二十三日に没している。貞享二年刊『京羽二重』の「書物屋」の項に法華書の版元として掲載されていることも、小川氏が既に紹介しているところである。住所は道也小左衛門と同じ「寺町通五条上ル」である。

是誰は戒名が安明是誰居士、寛文九年九月六日没。過去帳には「本屋市左衛門父」と記されている。市左衛門は『改訂増補近世版元書林総覧』によれば、江戸の書肆で、寛文五年『和歌色葉集』の出版があるという。是誰の住所は明らかではないが、その他の書肆中野はいずれも寺町通りで営業していることから、是誰も同じく寺町通り界限での営業と推測される。

太郎左衛門も同じく住所は「寺町通五条上ル」であるが、他の中野氏との関係の詳細は不明である。

つまり、書肆中野一族は皆、同じ区域で営業していたと推測されるのであり、おそらくテキストの調達の方法も含め、協力体勢のもとに営業を行っていたと考えられる。それは言い換えれば、松会のように営業上の繋がりを持つ側としては、おそらく書肆中野一族一丸との繋がりになるということだったのであろう。これだけの点数の松会版が中野一族の出版したテキストと一致するというのは偶然とは考えにくい。

ちなみに中野一族は、慶安年間には日本橋二丁目に中野仁兵衛、明暦年間には芝神明町に中野庄太郎、寛文年間には芝神明前に中野佐太郎、神田鍛冶町に中野孫三郎など、江戸に出店を設けていることなども江戸の出版界との繋がりを示唆するものといえよう。明暦二年には京都の小島弥左衛門、江戸の中野庄太郎、中野仁兵衛が相合で『女四書』を出版している。

中野一族はいずれも寛永年間を最盛期として主に仏書を中心に漢籍や医書等の出

版をしている書肆であるが、中野道也は、寛永九年と明暦二年に一連の舞の本を出版しており、娯楽に供するような本の出版を物の本と並行して行っていることが注目に値する。新たなコンセプトでの商品の開発として、このような分野の出版に乗り出したと考えられる。それでは同じ寛永年間に京都で営業していた他の大手の書肆たちはどのような動向をみせているのだろうか。村上平楽寺や西村又左衛門、風月宗智等は、いずれも仏書の出版を中心に漢籍や医書等も出版する、一貫して物の本を出す書肆であるが、中野のように、物の本の出版を中心としつつも、娯楽本も間々出版する書肆が存在しないわけではない。杉田勘兵衛や敦賀屋久兵衛等である。杉田は寛永十二年には『七人びくに』、寛永十七年に『聚楽物語』、正保三年には『十二段草子』や『花づくし』、『田村の草子』などを出版しているし、敦賀屋久兵衛は寛永九年に『ぢんてき問答』、寛永十五年に『清水物語』等を出版している。このうち敦賀屋久兵衛の『ぢんてき問答』は松会版も存するものの、中野ほど圧倒的な出版物の重複がみられるわけではない。しかも慶安五年松会版『初登山手習教訓書』（未見）の元版は寛永十三年中野市郎右衛門版、明暦二年松会版『小笠原流躰方百ヶ条』の元版も寛永九年中野市右衛門版と考えられ、両本は京都で中野市右衛門以外の書肆からの出版を確認できない本であることをもってしても、松会と中野が繋がりを持っていることは明らかであろう。さらに江戸版が出版され始める万治年間直前、すなわち明暦四年までの求版以外の松会版を見渡してみると、その元版のほとんどが中野一族出版本と林甚右衛門版で占められている。林甚右衛門が松会と繋がりのある書肆であることは既に述べたことがある⁽⁵⁾。こうしたことから中野一族もまた松会の営業開始当初から何らかの繋がりがあった書肆と考えられよう。このことは、たまたま営業上の繋がりをもった書肆が娯楽本の出版も行うような書肆であったことが、松会が江戸でそうした娯楽本の出版に本格的に着手しようとしたきっかけを作ったということなのか、あるいは以前から指摘しているように、京都の営業上の繋がりのある書肆たちは、江戸の松会等のグループと何らかの共通の属性をもっており、その属性自体が娯楽的な本の出版を展開していくような素地を有していたということなのか、このあたりはさらに検討すべき課題であろう。

明暦以前の挿絵入り松会版

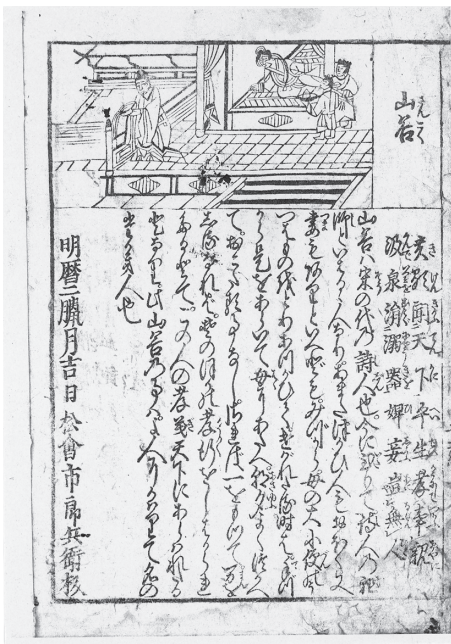
こうした中野一族等と営業上の関係をもち、テキストの確保をしていたと考えられる明暦以前の松会版のなかに、実は何点かの娯楽的挿絵本がある。以下の本である。

- 明暦二年『二十四孝』（架蔵）
- 明暦四年『大坂物語』（未見）
- 明暦四年『八島』（未見）
- 明暦四年『たかだち』（スウェーデン王立図書館ノルデンショルドコレクション所蔵）

このうち『大坂物語』は、他の『大坂物語』諸本をみても、おそらく挿絵入りであろうと推測されるが、かつて古書目録に掲載された写真一葉を確認しただけで、全体は未見である。その他の『二十四孝』・『八島』（未見）・『たかだち』は、いずれも中野道也が元版と考えられる本であることが注目される。『八島』は弥吉光長が論文⁽⁶⁾のなかで紹介したことのある本であるが、管見に入っていないので、『二十四孝』と『たかだち』について検討してみる。

1. 『二十四孝』の展開

版本『二十四孝』については、すでに母利司朗によってその諸版の考察が行われ



松会版『二十四孝』（架蔵）



水田版『二十四孝』（架蔵）

ている⁽⁷⁾。母利は、一話一丁の様式の嵯峨本系『二十四孝』とは様式的に異なる系統の本の筆頭に明暦二年松会版『二十四孝』を挙げ、この松会版から刊記の「明暦二臘月吉日」と「市郎兵衛」を削った版、刊記をすべて削った版の二種と、さらにその覆刻である河村治郎七版と無刊記本を紹介しているが、今回もう一本同様の本を確認することができた。水田甚左衛門版『二十四孝』で、松会版と覆刻の関係にある本である（図2）。この水田甚左衛門は、以前述べたように江戸の松会のグループにテキストの提供をしたと考えられる書肆のひとつである⁽⁵⁾。つまり、本来であれば京都版である水田版を松会が利用していると考えるのが一般的なあり方なのであるが、この水田版と同様の河村版と無刊記版は松会の覆刻本とみなされてきた。しかしこの水田版『二十四孝』が出現したことによって、松会版と水田版、さらには河村版もということになるが、その関係については再考の余地がありそうである。というのは、松会が挿絵本を本格的に出すようになるのが、万治以降のいわゆる江戸版様式が確立してからなのであるが、『二十四孝』は明暦二年という、いまだ江戸版の様式が確立していない時期の出版である。この時期に松会が京都の嵯峨本系『二十四孝』からテキストを利用して、挿絵部分に関しては全く新たな明版風の挿絵を独自に作成できたのかという点についてはやや疑問が残る。母利が指摘するように、京都版が一話一丁であった版式を、松会版は一話半丁になっている点は、万治期に確立する江戸版様式が、京都版より行数を多くして丁数を減らす特徴と合致する。しかし挿絵が師宣風でないこと、字風も典型的な江戸版様とまではいえないことに加え、挿絵の出来栄えという観点からも、挿絵によっては松会版より水田版の人物の表情の方が必ずしもぎこちない、あるいは稚拙だとは言い切れないものもある。そこで母利が松会版と河村版の本文の異同について指摘した点を、水田版を加えて検討してみよう。まず句点が、松会版は。であったのが河村版は・になっている点に関しては、水田版は。である。また母利が指摘したルビや本文についての異同に、水田版の異同も加えてみると次のようになる（松会版→河村版→水田版の順）。

1. 〈孟宗〉^{すなはちもうそう} 則 孟宗^{すなは}→^{すなはちもうそう} 則 孟宗
2. 〈曾参〉^{ゆび} 指→^{ゆび} 指
3. 〈王祥〉^{なし} 無→^{なし} 無
4. 〈王祥〉^{てう} 肇慶府^ふ→^{てう} 慶府^ふ→^{てう} 慶府

これに新たに気づいた異同を加えてみる。

5. 〈漢文帝〉る→とる→とる
6. 〈漢文帝〉代^よ→代→代
7. 〈漢文帝〉民^{たみ}→民→民
8. 〈孟宗〉ものにつく里→ものにつくり→ものにつくり
9. 〈老萊子〉庭^{てい}蘭^{いかに}→庭^{てい}蘭^{いかに}→庭^{てい}蘭^{いかに}

これらを勘案してみると、4以降の異同は、河村版と水田版が一致している。ここから松会版から河村版と水田版がそれぞれ覆刻したのではないことが判明する。松会版をそれぞれが偶然同一の、松会版とは異なる表記にしたとは考えにくいからである。4はもし水田版が元版だと仮定すれば「てう慶府」を松会が「^{てう}肇慶府」と表記を替えるためには、別本の『二十四孝』が手元になければ起こり得ない現象のため、松会版が元版である可能性を示唆する箇所である。また9は松会の「てい」という読みが正しい。5は河村版や水田版は「と」と読めるが、実はこの部分は本来「さるほどに」という語の冒頭部分だが、「佐」のくずし字のにんべんが無い字になっているため、「と」のように読める。松会版は模写の際、この部分の文意が通らず、躊躇した結果が空白というかたちになったことが推測される。この点は松会版が水田版あるいは河村版を覆刻した可能性が高い部分といえよう。しかし全体的にはやはり松会版が初版である可能性が高いということになるうか。とにかく河村版と水田版は近い関係にあるといえそうである。おそらく河村版も京都版であろう。しかし松会版を元版と断定するには今少し検討を要する。松会版の刊記の「松会市郎」の部分が、墨付の具合（図版ではうまく表れていない）、および字体が微妙に異なるのも気になるところである。今後あらたな新出本が出ることを期待して今後の検討課題としたい。

明版風の挿絵を有する絵本は、たとえば京都では慶安三年藤田庄右衛門版『有像列仙全伝』や承応二年小嶋弥左衛門版『新刻古列女伝』等があり、初期出版界挿絵入本の出版が興る契機になったのではないかと考えられている。京都ではこういった明版風の挿絵を作成する絵師が存在しているという環境があるわけで、『二十四孝』もそうした絵師が携わった一本であったという可能性も考えられるのである。ちなみに前述した明暦二年京都と江戸の相合版『女四書』も明版風の挿絵を有しているが、この本は京都で作成されたと考えられるので、江戸の職人による挿絵ではない。こうした明版風絵入本は、いつごろから出版されているのだろうか。その点

を検討する材料として興味深い本がある。『国書総目録』に書名「人間楽事」で掲出されている本と考えられるが、これまで詳細が報告されたことのない本である。以下に紹介してみる。

〈『通俗人間楽事』（仮題）〉

個人所蔵。中本二冊。24.2 cm×17.4 cm。表紙は灰色無地、康熙綴じ。題簽は替え題簽、子持ち枠に「通俗人間楽事 前（後）」と墨書、（ただし「前（後）」は摺刷）。前巻は、内題が「饌名人芭瓊図説」。匡郭は無辺無界九行。漢文がいくつか続いた後に蓮牌木記「萬曆乙未歲孟夏吉旦／八十二翁楊兩川重梓」。その後、明版風の挿絵のみの丁が続き、挿絵の最後左側に尾題「房内府秘傳美女良方終」。内容は本文、挿絵ともいわゆる艶話である。後巻は、扉があり、子持ちの大枠で囲んだなかの中央に大字太字で「人間楽事」、その右側に小字で「修身」、左側に小字で「演義」と摺刷。内題は「黄素妙論」。匡郭は無辺無界九行。和文で内容は艶話である。本文の後に墨筆で「慶長十一丙午歲十月十六日／中村五兵衛」と記されている。

本書は、『艶本目録』に掲載されている書として知られながら、長く原本の所在がわからず、詳細の不明な本であったが、挿絵本出版史上、早期の本として注目されていた本である。上記の叙述から明らかなように、二冊はそれぞれ、艶本であるということが共通するものの、全く趣の異なる体裁、内容である。しかし二冊とも版面の墨色がやや薄いこと、料紙も同一の質感であることから、二冊で一部の本のようである。萬曆の刊記をもつ方の一冊は、明版の艶本の覆刻と推定される。後巻の和書風の一冊の本文後の墨書は、「丙午」が横に並んで表記されること、年記の次行の下方に「中村五兵衛」と表記されることなど、いかにも刊記風の表記で、書風もあたかも摺刷された文字を模倣したような感じである。この墨筆は何を意味するのであろうか。可能性として考えられるのは、刊記が本来備わっていた本が存在し、本書の墨筆はその本から刊記部分を模写したものなのではないかということであるが、推測の域を出るものではない。ただ後巻の字風はあたかも慶長期の古活字版舞の本の字風に類似しており、ちょうど古活字版舞の本を覆刻した寛永年間の一連の中野道也版のような感じであることから、慶長期の出版である可能性も否定できない。もしこの墨書がこの本の初版の刊年を示しているとすれば、明版からの挿絵本の影響は、京都の出版業が興ったごく早い時期から認められるということになるだろう。

2. 『たかだち』の展開

先述したように、娯楽的な本が出版され始め、どのように展開していくのかを考える場合、出版地の関係性の問題、ジャンルにおける関係性の問題という観点からの考察が必要なのであるが、そうした問題を総合的に考察する具体的材料として『たかだち』の出版がどのように展開しているのかを考察することは好材料といえる。当時の娯楽に供するような本の出版の題材が、ジャンルを超えて共通の題材を使用している一例であり、なおかつ京都版も江戸版も現存しているからである。江戸初期にジャンルを問わず出版された『たかだち』をリストアップすると次のようになる。

1. 寛永二年勝兵衛版古浄瑠璃『たかだち』京都版（原本焼失。本文は『古浄瑠璃正本集』所収の活字本で確認）
2. 寛永頃丹緑本舞の本『たかだち』京都版（東京大学総合図書館霞亭文庫所蔵）
3. 明暦二年中野道也版舞の本『たかだち』京都版（国立公文書館内閣文庫所蔵）
4. 明暦四年松会版舞の本『たかだち』江戸版（スウェーデン王立図書館ノルデンショルドコレクション所蔵）
5. 明暦年間本問屋版古浄瑠璃『あたかたかたち』江戸版（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）
6. 万治版舞の本『たかだち』江戸版（ソウル大学図書館所蔵）

このうち1の京都版古浄瑠璃と5の江戸版古浄瑠璃については、阪口弘之によって、古浄瑠璃の本文の展開という観点から既に考察が行われている⁽⁸⁾。阪口は寛永二年『たかだち』が舞曲の本文を流用したものであること、江戸版『あたかたかたち』の三段目以降が『たかだち』の本文に該当するのであるが、この部分は寛永二年版『たかだち』とほとんど同文ながらこれに依拠したものではないこと、両本は同じく浄瑠璃であり、人気の作品だけに参照があってしかるべきだが、寛永二年浄瑠璃本『たかだち』を飛び超え直接大頭系の舞の本に拠っていることなどを指摘している。また挿絵については、寛永期舞の整版本と一致すること、しかしながら寛永二年浄瑠璃本が、その後の出版である舞の整版本に依拠したものでないことは明らかなこと、したがって絵柄が浄瑠璃本と共通する奈良絵本『たかだち』（大谷大学所蔵）等をも含めて、これら諸本がことごとく依拠した絵手本が早くに存在したであろうことを指摘している。しかも寛永二年『たかだち』が、絵巻風の体裁をもつ

横本であることから、絵巻制作の場との関係を想定させるというのである。ということは、浄瑠璃本を出版する書肆はそれぞれに直接その元本といえる絵手本を有している場にアクセスすることのできる営業上のルートが存在していたということなのではなかろうか。この場とは「草紙屋」と考えられている。絵巻制作の場としての「草紙屋」と、浄瑠璃本を専門に出版する書肆として登場してきた「草紙屋」（「浄瑠璃本屋」とも）は区別して考えるべきであることについては前稿で述べたが⁽⁹⁾、なおかつこの二種類の「草紙屋」は、物の本も舞の本も出版する京都の書肆と比較した際には、より近い関係にあるということがいえそうである。

阪口の考察を踏まえ、これにさらに江戸で出版された舞の本『たかだち』二本を追加して検討してみよう。両本ともこれまで詳細な報告が行われたことのない本である。

〈明暦四年松会版『たかだち』〉

スウェーデン王立図書館ノルデンショルドコレクション所蔵。大本二冊、26.5 cm×17 cm、表紙は左肩題簽、縹色無地。題簽は子持ち枠に「絵入（以上角書）たかたち 下」（上巻は剥脱）と摺刷。内題は「たかたち 上（下）」。匡郭は四周単無界十四行。柱題は「たかだち 上（下）（丁数）」、刊記は本文の後に「明暦戊戌曆季夏吉日／松會開板」。この本から刊記の「明暦戊戌曆季夏吉日」を削除した本が東北大学付属図書館狩野文庫に所蔵されている。料紙はやや灰色がかっているものの、比較的張りのある紙質で、万治・寛文期にみられる繊維の短いぼそぼそした感じの江戸版の典型的な料紙の紙質とはいえない。また挿絵は奈良絵風で、江戸版の特徴である師宣風の絵ではない。松会版が師宣風の挿絵を有するようになるのは万治・寛文期からであり、この明暦四年版『たかだち』は、その直前の出版ということになる。内容としては舞の本という、それまでの松会版の出版にはなかった新たなコンセプトの本という位置づけができるものの、様式的にはいわゆる江戸版様式には完全にはなりきっていない、過渡期の本ということができよう。

〈万治版『たかだち』〉

ソウル大学中央図書館所蔵。大本、上下合冊。26.2 cm×18.1 cm。表紙は縹色無地、左肩題簽。題簽は替題簽、無枠の題簽に「高館物語 明暦二年」と墨書。内題は「たかたち 上（下）」。匡郭は四周单边無界十五行。柱題は「たかたち」、刊記は本文最終丁オモテ、本文の後に「万治（欠損）」。欠損部分にあるいは書肆名が摺

刷されていたかもしれない。ちょうどその程度の空間である。上巻初丁と三一四丁、下巻初丁は欠丁だが、他の同版本によって補写されている。字風は典型的な江戸版様で、なかでも山本九左衛門風の字風である。料紙はややぼそぼそした黄土色で、江戸版にもまま見られる質感である。挿絵はテキストの内容上、主に武者が描かれているが、そうした人物の顔の画風は稚拙な師宣風という絵もあれば、師宣風というには微妙に異なる画風の絵もある。しかし諸点を総合すれば、いわゆる江戸版としてよい本である。刊記を削除した本が慶応大学図書館に所蔵されている。上巻初丁と三・四丁、下巻の初丁の補写は、慶応本と照合した結果、版本通りの模写がおこなわれている。

この万治版の本文は、明暦四年松会版の本文と同一の本文である。江戸版は京都版を元版として江戸で作成される際、京都版とは異なる様式で作成されるのだが、一旦江戸で作成してしまうと、テキストを共有する書肆が再度そのテキストを利用して江戸版を作成する場合、最初の江戸版の覆刻であることも、行数や挿絵が異なる別の様式であることもある。そこにあまりこだわりは無いようである。『たかだち』の場合は、最初の江戸版が明暦四年版なので、厳密に言えば江戸版の様式が確立する以前のケースといえるのであるが、京都から江戸へ入ったテキストが、それぞれ異なる様式で二つの江戸版が作成された例ということになる。

以上二本の江戸版舞の本『たかだち』と京都版舞の本『たかだち』はどのような関係にあるだろうか。京都版の丹緑本と明暦二年版『たかだち』の本文は同一である。そして江戸版は、それら京都版の本文に依拠している。ただし本文全般に若干のてにをはの違いはある。たとえば「人々には」が「人々は」となっていたり、「とどめて」が「とどめ」となっている程度の異同は存するが、修飾語の増減や言いまわしの変化等は全くない。また京都版『たかだち』は、本文の所々で文の終わった後に一字分の余白があるが、江戸版舞の本は両本ともこの部分に▲が入っている。表記の仕方は異なるが、同一の構成であることは明確である。これらのことから江戸版舞の本『たかだち』は、京都版舞の本に依拠していると考えてよからう。さらにいえば、松会の出版が中野道也版を元版としている例の多さを考えれば、江戸版『たかだち』は、明暦二年中野版を利用して作成されたものではないかと考えられる。江戸版の出版の順序から考えれば、まず松会が京都版に依拠し、その松会版に基づいて万治版が成ったかに思える。しかし挿絵についてみると、松会版と万治版は異なる挿絵であるが、明暦中野版の挿絵の構図をそれぞれが利用していることは明らかである。ということは、京都のテキストが江戸に入ってから異なる様式

で複数の江戸版が作成される場合、それぞれの書肆が直接京都版に依拠し、作成しているのであろう。

それでは浄瑠璃本と舞の本の本文はどのような関係にあるだろうか。結論からいえば、両者の本文は、同系列のものではない。もちろんストーリーの展開は同じなのだが、舞の本は全般に状況説明が詳しい傾向がある。この点は既に横山重が『古浄瑠璃正本集』の寛永二年版『たかだち』の解題において、寛永版舞の本の本文と比較し、一段目は鈴木三郎重家が奥州へ下るとき、妻との別れの対話が浄瑠璃は長くなっていること、鈴木が欧州下りの道行が浄瑠璃は略されていること、二段目は、鈴木が弟亀井に家重の鎧を与える時に語るところの熊野の本地と同じ内容の物語が、浄瑠璃は省略されていること、五段目は逆に舞の本が弁慶の最後までで、浄瑠璃本はその後の義経の最後までを書き添えていることを述べている。つまり双方に増減はあるが、全体としては舞の本の方が丁寧な叙述になっているといえる。この横山の指摘は、そのまま古浄瑠璃本『たかだち』全般と舞の本『たかだち』全般の本文の関係を示唆するものであり、両者は別系統の本文であると結論付けることができるのである。

以上のような『たかだち』諸本の関係を踏まえ、前述した三つの問題系で考えてみると、まず、京都と江戸の出版界の関係という点については、娯楽本の出版については、京都に本を作成するにあたっての題材を提供するような場があり、そこは絵巻物等も作成しているような場であったと考えられる。そこに蓄積されている絵手本のようなものを元にして舞の本や仮名草子や浄瑠璃といった異なるジャンルの作品が共通の題材で作成、出版されるのであるが、これら諸ジャンルのうち、浄瑠璃だけは浄瑠璃専門の書肆が登場してきて、その各書肆が絵手本を提供する場とそれぞれ並列的に繋がって題材を得ていると考えられる。京都の浄瑠璃本屋も江戸の浄瑠璃本屋も、絵手本を有する場とは各書肆は同等の距離にあるらしいのである。一方、舞の本や仮名草子を出版する書肆、すなわち本稿で指摘した中野一族をはじめ、以前に明らかにしている松会グループと繋がりのある京都の書肆たちは、物の本も出版する、娯楽本を専門に出している書肆ではないという共通の特徴がある。これらの書肆は、浄瑠璃本屋とは異なるルートで絵手本を入手するのであり、創業して間もない江戸の書肆は、地理的な距離の問題も含め、直接はそのルートに参入するのが難しい状況にあったのではないかと想像される。そこで、松会がそれまで

営業上の繋がりがあった書肆が出版した娯楽本を、様式を変えることを条件として利用し始めたそのさきがけの出版が、本稿で紹介した明暦四年松会版『たかだち』ではないかと思われる。松会版『八島』は未見だが、『たかだち』と同じ明暦四年の出版であることから、おそらく『たかだち』同様の、完全な江戸版様式が確立する以前の過渡期の様式を有する本ではないかと推測される。そして万治・寛文期になると、松会は江戸でいわゆる江戸版を作成する他の書肆とグループをつくり、繋がりをもつ京都の書肆も増加し、明確な条件のもと（すなわちそれが江戸版様式の確立ということになるが）、安定して元版を利用する体制を確立したのである。故に同じ通油町界隈で営業し、なおかつ共通の題材で出版を行っていても、松会のグループと浄瑠璃本屋は異なるルートでテキストを入手しているため、本文に直接的な影響関係は生じていない。このことは後に物の本屋と草紙屋が明確にその業態を異にすること、具体的には書肆の枠組みとしても別枠で、本の流通も全く異なるかたちで営業のしくみが確立していくことの、大元の要因とみなすことができるのではなかろうか。

ということは、物の本も出版するような書肆が出版した仮名草子の類は、当時の感覚からいえば、草紙類というカテゴリーには分類されない書物なのではないかと考えられるのである。

ところで、明暦年間の出版とされる江戸版『あたかたかたち』は本問屋の出版である。本問屋は万治年間になると松会らとグループを形成し、京都版のテキストを共有して江戸版を作成した書肆である。その本問屋が浄瑠璃の正本を出版しているという事実は、これまで述べてきた、浄瑠璃屋とそれ以外の娯楽本を出版する書肆が枠組みを異にしているということと矛盾することになる。この点については、本問屋の出版活動は、万治年間に入ると浄瑠璃の出版は確認できず、仮名草子や舞の本等の江戸版様式の出版だけを行うようになることから、万治期に他の書肆と共に江戸版の出版という安定した営業システムを確立する以前の、本問屋の一時的な営業の試みと説明できるのではないかと考える。延宝期になり、江戸版作成のシステムが崩壊すると、江戸版を作成するグループの一員であった本問屋や山本九左衛門は、「草紙屋」のカテゴリーに移行したと考えられ、その後「地本」を出版する書肆になっていくのである。

注

1. 実はこの中野版には覆刻の関係にある本がもう一本存在している。後表紙見返しに「寺町 中嶋九左衛門／正保四年丁亥霜月吉日」と摺刷された本（国文学研究資料館所蔵）である。中野版と中嶋版と松会版はすべて異版で、三本とも覆刻、あるいはその元版という関係にあることは明らかである。一般的に考えれば京版である中野版と中嶋版はどちらかが元版とも考えられるが、奥付が両本とも書肆の部分の墨付がやや他の部分と均一でないため、両本とも元版でない可能性も残しているが、本稿ではとにかく中野五郎左衛門版が存在しているということが重要である。
2. 『した』以下に列挙した舞の本は国立公文書館内閣文庫所蔵の一連の舞の本である。体裁がすべて同一であることから、同時に出版されたと考えられるが、そのすべての本に刊記があるわけではなく、『景清』の文末に「明暦二丙申仲冬／書林／中野氏道也新刊」という刊記があることをもって他の舞の本も明暦二年刊本として扱っている。
3. 安藤武彦「出版書肆中野道伴伝関係資料」（『日本古書通信』376号、日本古書通信社、昭和50年）。「書肆中野五郎左衛門のことなど」（『京古本屋往来』10号、京都府古書籍商協同組合、昭和55年）
4. 森潤三郎『考證学論攷』青裳堂、昭和54年）
5. 柏崎順子「江戸版考 其三」（『人文・自然研究』第四号、一橋大学大学教育開発センター）、柏崎順子「江戸版からみる一七世紀日本」（『書籍の宇宙一広がり』と大系』所収、平凡社、2015年）
6. 弥吉光長「松会版の探求——江戸初期の絵入本（一）」（『ビブリア』75、天理図書館、）
7. 母利司郎「『二十四孝』諸版解題——嵯峨本模刻版の部——」（『国文学研究資料館調査研究報告書』7号、国文学研究資料館、1986年）、「『二十四孝』諸版解題続稿——松会版以後の部——」（『国文学研究資料館調査研究報告書』8号、国文学研究資料館、1987年）
8. 阪口弘之「操浄瑠璃の語り——口承と書承——」（『伝承文学研究』42巻、1994年）
9. 柏崎順子「江戸初期版本の挿絵——延宝期以前——」（『言語文化』第52巻、一橋大学語学研究室、2016年）